
盗撮された下着泥棒

頬白丼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗撮された下着泥棒

【Zコード】

N7076A

【作者名】

頬白丼

【あらすじ】

水泳の授業中に女子生徒の下着が盗まれた！そしたら盗撮カメラが見つかって、下着ドロはあっさり判明。……じゃあその盗撮カメラは？新聞部の一人が、犯人をつきとめる！

(前書き)

この物語はフィクションであり、実在の事件、人物などとは一切関係ありません。

「ああ、ツクシ、ちょうどいい所に来た。彼女と『コレ』を観てくれ」

新聞部員、春日ツクシ（かすが つくし）が部室に入るなり、僅か二名の新聞部員のもう一人、桜井龍人に、そう言われた。

部室には龍人の他にもう一人、女子生徒が来ており、端にある応接用のソファに、龍人と向かい合わせで座っている。長い髪をボーネイルにした、どこか落ち着いた印象のある生徒だ。

ツクシは彼女に軽く会釈をし、龍人に歩み寄る。どうやら、龍人が言う“コレ”とは、DVDのようだ。サイズからして、家庭向けのビデオカメラに使用する物だろう。

「別にいいけど、リユートは観ないの？」

龍人は首を振り、ツクシにDVDを渡す。

「女のツクシにしか頼めないことだ」

そう言われ、DVDの内容に察しがついたツクシは、テレビをつけ、パーテーションを移動させ、外から見えないようにした。龍人はすでにパーテーションの外に出ている。

「あの、ええと……」

女子生徒に確認しようとして、まだ名前を訊いていないことに気が付く。

「あ、みやの宮野涼子です。桜井くんと同じ、一年一組です」

丁寧な自己紹介に、ツクシも恐縮して

「あ、春日ツクシです。一年三組です」

と、丁寧な自己紹介で返す。

「……で、宮野さん。このDVDには、宮野さんのプライバシーに関わる映像が入っていると思います。これから上映しますが、いつでも停止していただいて結構です。また、私も内容を確認しますが、いいですか？」

涼子は同意の意思を、大きく頷くことで示した。

「解りました。では、流します。リモコンをどうぞ」

ツクシはDVDデッキの再生ボタンを押し、テレビのリモコンを涼子に渡した。いざというときは、テレビの電源を消してくれ、ということだ。

テレビには、誰も映つていなかつた。ツクシは軽く拍子抜けするも、カツコよく決めた手前、黙つて画面を見る。場所はツクシも覚えがある。プールの更衣室だ。全体を広く捉えたアングルで、更衣室の奥の隅、ロッカーの上辺りに設置されているのだろう。

数人の女子生徒が入室した後、涼子が入り、入口から一番近いロッカーで着替え始めた。

水着に着替えた涼子はそのままプールへ繋がるドアを開け、退出。

「……えーっと、これだけ？」

思わず口をついて出でしまう。もっと過激な映像を想像していたからだ。

「いや、重要なのはその先だ。早送りしてみるといい」

パーテーションの向こうから、龍人の声が聞こえる。ツクシは周りを確認してみるが、龍人が覗いている様子はない。龍人に言われたとおり、早送りをする。

やがて、更衣室から誰もいなくなつたころ、一人入室した。

「これ……え？」

入室したのは、服装から見て男性。しかも教員のようだ。

「体育の松川！」

体育教師の松川広志だ。三十代半ばで、どちらかといふと厳しく、生徒の評判は悪い。

松川はゴソゴソと手探りをすると、涼子の下着を持つて退出した。

「松川先生が……私のパンツ……」

それを聞き、思わず視線をスカートに向けてしまつ。裾からは、体育着のハーフパンツが覗かれる。

「入つてもいいかな？」「大丈夫ですよ

パーテーションをずらしながら、龍人が入ってきた。

「富野さんの下着を盗んだのは、体育科の松川教諭で間違いない、と。富野さんはどうしたい？」

龍人が涼子に尋ねる。

「どう……つて、例えば？」

涼子は、どう答えればいいか、解らないようだ。

「記事にしていいかどうか。記事にする場合、もちろん富野さんの名前は伏せます、が、周囲に知られる可能性が高いですね。当然、記事にしない場合でも、我々は変わらず協力します」

龍人の長い説明も、涼子は理解しているようだ。

「私が下着を盗めたのは、もうみんな知っています。だつたら、松川先生の悪行を公開して欲しいです」

しつかりとした口調で、そう言つた。

「あの、あげ足取るようで悪いんだけど……」

おずおずと、ツクシが割つて入る。ところが、後に続いたのは龍人だ。

「記事にする方向で調査しますが、富野さんを含め多數の生徒が盗撮されていたことは、我々しか知らない。盗撮に関しては、どうしますか？」

まさにツクシが言いたいことだつた。この場にいる三人が、ちゃんと盗撮を認識し、涼子がどこまでを同意したのかの確認である。「リユート……相手は女の子なんだから、私が訊かないと……」

「あ、失礼しました」

男性に“盗撮されている”などと言われれば、あまり良い気はないだろ？。ただでさえ盗撮されているといつのに、追い撃ちをかけるようなものだ。

「いえ、気にしないで下さい。桜井くんには手伝つてもうつてるんですから……それで、盗撮の方は……考え方で下さい。盗撮の被害者は私だけではないですから……」

無理もない。そう即決できるものではないだろ？。

「解りました。盗撮犯も解つてませんし、記事になるのは当分ないことでしょう。では、後は任せて下さい。富野さんは、下校してもらって結構ですよ」

しかし、涼子は動かない。

「あの……一人じゃ……その……」

「リュート？」

「……ツクシ、調査は明日からにしよう」

この日は、そのまま三人で帰ることになった。

その日の夜、ツクシの携帯電話に、龍人から着信があった。

「どうしたの？」

『今日のことだが、全然説明してなかつたんでね。本当は富野さんが帰つてから話そうと思つてたんだけど、送るハメになつたから、こうして電話した訳だ』

確かに、ツクシはいつの間にか巻き込まれ、概要はなんとなく解りはするものの、龍人がDVDを入手した経緯などが解らない。

「ゼビゼビ教えて！」

マイノートパソコンに、メモを取る準備をする。

『今日の四時間目、一組と二組の水泳が終わつた後、富野さんの下着がなくなつてることが発覚した。まあ、ツクシはさつき観たから解るだろうけどね』

「その犯人は松川だつたね」

体育科の松川。盗撮カメラがあるとは知らず、カメラの前で堂々と下着泥棒を働いた、運のない教師。まあ、彼には否しかないので、順当なだけだ。

『ああ。マヌケだが、同情はできない。天羅地網。悪は天によつて裁かれるべし……つて言いすぎか……で、昼休みに彼女は更衣室へ行つて、改めて探したところ、指定の水泳力バンに入れられた、盗

撮カメラが見つかった

「ん？ ジャア、リコートは彼女からDVをもらつただけ？」

『ああ。物が物だけに、自宅では観にくいし、他の子の姿も映つてゐるだらう……ってことで、再生機器もあるし、こういつた事件の処理に慣れてるであろう新聞部に預けた……という経緯だ』

「なんか嬉しいね。信用してもらつて」

普通なら教師に預けるところ、新聞部に預けたのだ。少なくとも教師より信用してもらえてないと考えていいだろ。当時は知らなくて、松川のような教師がいるわけだから、結果的に最良の判断だ。

『だから、その信用に応えなければならぬ』

「そうだね！ ジャア、明日は松川に下着ドロのことで話を訊かなきや！」

『いや、それはダメ』

気合が入ったといふのに、いきなりのストップ。しかし、龍人が言つからには、なにがあるはずだ。

『確かに松川の犯行だし、DVを見せれば言い逃れはできない。でも、現段階で例のDVを見せた場合、間違いなく“カメラは新聞部が取りつけた”と言つてくるね』

「ヒドイ！ そんなこと通るわけないじゃない！」

『残念ながら通る。盗撮DVを持つてたヤツが、一番盗撮犯っぽいだろ？』

「うう……でも仕掛けたから、仕掛けたって証拠はないじゃないだろ？」

『その代わり、仕掛けでない証拠もない。となると、なぜこのDV

Dを持っているか、だ』

『それは富野さんに預けられたからだよ。……あ！ 富野さんに証言してもう……つても、誰が仕掛けたかは判らないかも……むしろ証拠隠滅のために預かつた』って思われるかも……』

『そりだ。逃げるために必死なヤツは、何でもしてくる。となれば、

盗撮犯を特定しないことには、松川に証拠をつきつけられない』

「うう……犯人は解つてゐるのに……」

『ま、しかたない。半分は終わつてゐんだから、後半分と考えよう』

「そつか……そだね』

そこで、彼女はふと氣付く。普段の力バンの隣に置いた、指定の水泳力バンに。

「……ところでリュート、その盗撮カメラ、いまドコにあるの?』
『いまは俺の手元にある。明日の早朝、同じモデルのディスクを入れて、元の場所に置いておくつもりだ』

元の場所、つまり……。

「つて、リュートが盗撮してビーするの! 明日の六時間目は私も水泳あるんだよ?』

『正常に動くけど、レンズとマイクは殺してある。録画しても、なにも映らないし、なんの音も記録されない』

「……ホント?』

『ウソついでどうする』

『じゃあ、何で危険なマネしてまで、仕掛けるの?』
『なんとなく、ツクシも理由は解つてゐる。が、それが予想通りだと確かめるのが、楽しみもある。』

『犯人をハメるために決まつてるだろ』

それはツクシの予想通りの答えたつた。

翌日の昼休み、ツクシは部室に呼び出された。相手は当然龍人である。

「どしたの?』

『いろいろ。話しておくれることとか、やつて欲しいこととか、だな』

『結構大詰め風。犯人判つたの?』

ツクシは冗談混じりに言つ。

『見当はついてる』

「え！ 誰？」

ツクシは容疑者候補すら把握できていない。それなのに、龍人は犯人の見当がついていると言うのだ。

「とりあえず順を追つて行こう。まず、更衣室にカメラを仕掛けやすい人は誰？」

これは簡単な問題。ツクシにもすぐ判った。

「体育の先生ですっ！」

「そうだな。カギを管理してるのは体育科だし、更衣室、プール附近にいても不自然じゃない」

教員用の更衣室は、生徒用更衣室の隣にある。“忘れ物をした”とでも言えば、見咎められることはない。

「でも、体育の先生六人いるよ？」

「不特定多数から六にまで絞り込めたじゃないか。いや、まさか自分が仕掛けたカメラの前で、下着泥棒をするバカはいないから、五だね」

改めて確認することではないが、盗撮に関しては、最初から松川は除外している。

「なんか『特定されてきた』って感じだね」

「まだ特定していくぞ。ちなみに、現時点で、俺は一・五人だ」

「なにその小数点？」

「限りなくシロに近いが、可能性が残ってる人が一人。それがコンマ五」

通常、人間は整数で数える。

「……それはいいけど、なんでそこまで特定できるの？」

「富野さんの話だと、彼女は入口に一番近いロッカーを使ってたんだよな？」

言われて、昨日観たDVDを思い出す。

「うん」

「松川は男だ。富野さんの下着を取ったんじやなくて、入口から一番近いロッカーの下着を取ったんだろうな」

「あ……そうか」

いくら体育教師とはいえ、女子更衣室にいては問題。極力女子更衣室にいる時間を減らすために、一番近いロッカーを狙つた……というわけだ。

「……それと盗撮犯になんの関係が……あ！」

「解つたみたいだな」

「うん。犯人は女の体育の先生！」

カメラが仕掛けられていたのは、よりもよつて更衣室の一番奥。いつ他の教師や、生徒が来るか判らない中、更衣室内でそれなりの時間をかけて仕掛けるなど、男性では考えにくい。入口付近なら、見付かつたとしても“見回り”と言えるが、室内では難しいものがいる。その点、女性教師なら、作業中に見付かつても、さも“今”カメラを発見した”ように振る舞えばいい。むしろ、入口付近で作業している方が怪しいくらいだ。

「それで、だ。女性の体育教師は相坂先生、島崎先生、須藤先生の三人がいる。誰だと思う？」

「う……三分の一……」

「三分の一で犯人にするなよ」

「や……野球なら三割打者つ！」

「……解らないってことね。じゃあ、俺が調べた、この三人の情報を教えてやろう」

そうして、龍人は三枚のメモを取り出した。一人につき一枚、情報が書き込まれている。

相坂早苗（二十七）

担任……一年三組

顧問……陸上部

授業……一年生女子全般

昨日の行動……一、五、六時間目の体育で水泳の指導。一年三組の

ホームルーム。放課後はトラックで陸上部の指導。ずっと陸上部に付き添っていた。

「相坂先生はシロね？」

メモを読んだ直後、ツクシが口を開く。

「どうしてそう思う？」

「もし相坂先生が犯人なら、DVDは六時間目が終わつたときには、更衣室の見回りをしながら入れ換えるはず。入れ換えなくても、チケットくらいはするでしょ？ すると、昼休みの段階で富野さんがカメラを回収してたから、カメラが無いことに気付くよね？ そーなつたら、部活の指導どころじゃないわよ。怪しまれないために少しばかし出でてもいいけど、『ずっと』はムリだと思う」

「ん……少し弱いけど、まあいい。相坂先生ではないという点は、俺と一致してる」

龍人と考へが一致しているだけで、嬉しさがこみあげてくれる。

「とりあえず、島崎先生と須藤先生のメモ、読んでみる」

島崎一恵（三十八）

担任……一年四組（副担任）

顧問……お笑い同好会

授業……一年一、二組。二年三、四、五組の女子体育全般

昨日の行動……三時間目、三年二、四組の体育^{ティース}。四時間目、二年一、二組の水泳。更衣室の最終戸締まり。掃除監督場所……プール及び

更衣室等

須藤光枝（三十六）

担任……三年二組

顧問……女子バレー ボール部

授業……一年三、四、五組。三年一、二組の女子体育全般
昨日の行動……朝、更衣室を開ける。一時間目、二年五組の体育で
水泳の指導。三年二組のホームルーム。放課後女子バレー ボール部
の指導。

「補足すると、プールの授業がある期間は、朝は須藤先生が更衣室を開け、放課後は島崎先生が更衣室を閉める当番になつてゐるらしい」「つて、この一人がめちゃくちゃ怪しいじゃん！」

毎日更衣室を開ける人と、毎日更衣室を閉める人。どちらでも、カメラを仕掛けたり、DVDの入れ換えは容易だ。

「さつきツクシが言った、『相坂先生が犯人でない理由』それと、朝も放課後も更衣室の開け閉めの当番じゃない。盗撮しようとすると、立候補してでもやるはずだ。逆に、若い先生に当番を押し付けそうなものだというのに、彼女がやってないことで、年輩の先生がやつてる不自然さが目立つ」

つまり当番の教師どちらかが、“立候補しても”当番になつた可能性が高い、ということだ。

「なるほど」

「まあ、十中八九、犯人は『彼女』だろうから、決定的な証拠の回収を頼む」

「決定的？」

「ツクシ、俺がわざわざ盗撮カメラを元に戻しておいて、何も仕掛けないと思ってたのか？」

ツクシは、その“仕掛け”的回収を命じられた。

水泳の授業が終わったあとに、龍人の“仕掛け”は回収した。その結果を龍人に電話したとき、“放課後、直接犯人のもとへ行け”と指示を受けた。セリフに關しても、である。

田当ての教室へ行き、ホームルームが終るのを待つ。やがて、出てきた教師に、話しかけた。

「先生、女子更衣室で、盗撮カメラがみつかったんですけど……」教師に慌てた様子はない。

「そう、それがそのカメラね？　どの辺にあったの？」

……だが、墓穴を掘つた。

「先生、確かにカメラは水泳カバンに入つてましたけど、これは私のカバンです」

教師の顔に、“しまつた”と書いてあるかのようだ。

「不思議ですね。水泳カバンに入つてたつて言つてないのに、私の水泳カバンと間違うなんて」

教師は、視線が定まらない。

そして、まつたく別の方から声をかけられた。

「須藤先生、カメラはこっちです。廊下で立ち話もなんなんで、ちよつと部室までご足労願えますか？」

龍人と涼子が、カメラを持つてやってきた。傍らには、カバンを持った松川もいる。打ち合わせ通りなら、須藤のカバンだろう。

「では、私は……仕事があるので」

カバンを龍人に預け、逃げようとする松川に、龍人が声をかける。
「すいません、松川先生。カメラ発見の証人なんで、一緒に来ていただきたいんですよ」

しかしまわりこまれてしまつた。

部室に場所を移すと、龍人は語り始めた。

「須藤先生。あんな一時間ドラマや推理小説やマンガやアニメで散

々使い古された手法で、あなたが盗撮犯と特定したわけじゃないですよ」

暗に“須藤は使い古された手法にハマつた”とも言っている。

「そ……そもそも私はそんなカメラなんて知らないわよ。彼女が持つてたから、それがカメラかと勘違いしだけ」

「テンプレートな言い訳、ありがとうございます」

見越している、ということだ。

「とりあえず、昨日の昼休み、富野さんがカメラを発見、回収したときのディスクについてです」

「き……昨日の昼休みに回収？ なんで今日あつたの？」

須藤は、やはりカメラが回収されていたことに気付いていなかつたようだ。驚きのあまり、つい口から出でてしまったのだろう。

「今朝、僕が同じ場所に置いときました。ああ、カメラとしては死んでるので、盗撮にはなりませんよ。あと、今の発言は聞き流しておきます」

龍人に言われるまで、自身の問題発言に気付かなかつたようだ。
「い……いえ、今日発見したみたいだったのに、昨日だつたから、驚いちやつて……」

「聞き流したので、言い訳すると不振点に気付いちやいますよ？」
もちろん龍人は気付いているハズ。須藤は、完全に黙つてしまつ。「で、ツクシ、昨日カメラにセットされてたロvvロには、四時間目の映像だけしかなかつたんだよな？」

「うん」

「で、全員、制服から水着に着替えてたんだよな？」

「ん……そうだね。逆はなかつたなあ」

「僕も昨日の四時間目は水泳だつたんですが、男子も制服から水着に着替える生徒だけでした。つまり、三時間目はプールが使われない、ということです。これは確認しましたし、須藤先生、そうですね？」

「昨日は火曜だから……そつ……ね。三時間目だけプールが空いて

たわね」「

「その三時間目は、あなたはディスクを交換したんですね」

まさに直球勝負。はっきりと、断定口調。

「な……何をいきなり」

「三時間目に授業がない女性体育科教師は、あなたと相坂先生だけです」

「どうして私なの？ 男は？ 相坂先生は？ なんで三時間目に交換したつて？」

「矢継早に言わないで下さいよ。……まあ、男性教師ですが、有り得ません。相坂先生！」

「うわ！」

突然話を振られ、驚いたようだ。もちろん、心当たりもイヤとうほどあるのだろう。

「もし松川先生がカメラのディスクチェンジをするために女子更衣室に入るとしたら、どうしますか？」

「わ……私は女子更衣室に入ったことなど無い！」

ムキになつているところを見ると、龍人が悪者に見えてくる。

「先生、仮定の話ですよ。それに、さつきカメラの回収に入つたじゃないですか」

「む、そうだった。私なら、あんな奥には仕掛けない。ディスク交換中みつかつたら大変だからな」

まるで経験者が語つているようだ。

「ということです、須藤先生。なぜ三時間目なのかというと、単純に四時間目の直前の映像しかないからです。一、二時間目に水泳があつたのに、その映像がありません。だとしたら、『三時間目にディスクチェンジして、次は翌朝』が自然なんです」

「相坂先生は？ 島崎先生は？」

「両先生とも、午後に更衣室に行つてます。仕掛けたのがこのどちらかの先生なら、そのときにカメラがないことに気付きます」

「よく解らない。相坂先生と島崎先生がカメラがないことに気付い

たらどうなるのよ」

須藤は龍人が言わんとしていることが理解出来ないようだ。

「昨日なかつたのに、今日はある。普通なら怪しがつて、ディスクを交換するハズがありません。しかし、今朝仕掛けたときと、違うディスクが入つてるんですよ」

龍人は、カメラからディスクを取り出して見せる。

「ディ……ディスクが違うって、どこに証拠が……」

「須藤先生。なぜ松川先生があなたのカバンを持つてるか、いまなら解りますよね？」

須藤は黙る。沈黙で、龍人の問いに答えていいのか。

「松川先生。カバンを開けてください。良いですね？ 須藤先生」やはり須藤は沈黙。唇の端が、若干震えているようだ。

「勝手に開けちゃいますよ？ ジヤ、松川先生。ようしくお願ひします」

言われるまま、松川はカバンを開ける。中から、化粧品などと共に、昨日入手したDVDと、同じモデルのディスクが一枚出てきた。

「須藤先生、これはなんですか？」

須藤は突然笑いだした。その声が、部室に響きわたる。

「それはバレー部の練習を撮影した物よ」

「なるほど。では観ても構いませんよね？」

「ダメよ。報道はお断り。他の学校に知られたら大変なのよ」

情報公開をしないという理由で、決定的なものを見せない。これでは、疑わしくても、疑わしい止まりになってしまつ。

「そうですか……ツクシ」

だが、龍人は自信タップリだ。

「はいっ！ ブラックライトー！」

「未来の世界のネコ型ロボットか？ しかも大山ヴァージョン」

ツクシがディスクにブラックライトを当てるとき、片方のディスクのレベル面に“あなたが盗撮犯。ｂｙ新聞部・桜井龍人”という文字が浮かび上がった。

「せつしき語った通り『昨日なかつたのに今日あると怪しい』んですね。このディスクは僕が仕掛けた物です。更衣室にあつたハズですが……バー部は更衣室で練習してるんですか？」

須藤は膝から崩れ落ちた。

「じゃあ私はもういいな？ 仕事が……」

退出しようとする松川の手を、龍人が掴む。

「松川先生、昨日我々が入手したDVDには、四時間目の着替えの映像が入つてて、もちろん、みんながプールに出ていった後も映されてるんですよ」

松川は青ざめる。

「さ……桜井。観たのか？ 盗撮ビデオを……」

「僕は観てませんが、ツクシと富野さんが確認してくれました」

「そ……それが……」

「なんでも、昨日の四時間目、富野さんの下着が盗まれましてね。その犯人が……誰が映つてたんだっけ？ 富野さん」

涼子は一瞬困惑するも、毅然として、その名を挙げた。

「松川先生です」

「ツクシも確認したよな？」

「うん」

この場にいる女子生徒一人に指名された。その上。

「だ、そうです。なんなら、観ますか？ 『己自分の雄姿を』龍人の言葉がトドメとなつたようだ。

「な……なあ、桜井。目的は金か？ 成績か？」

「そ……そつよ。桜井くん。私達にできることならなんでもするから……今回のことは忘れてもらいたいなあ……」

須藤まで。みごとに腐っている。

「ねえ、リコート。こんなこと言ひてるけど？」

「もうすでにムリです」

情け容赦のない龍人の一言。

「どうして……来年の入試だって、指定校推薦を優先して……」

往生際悪く、松川は好条件を惜しみ無く挙げるが、龍人が割つて入る。

「『もう』ムリなんです」

「き……君たちが黙つてさえいてくれれば……」

「ヒントは一つ」

「なんのマンガよ……」

指を一本立てた龍人に、思わずツツツミを入れるツクシ。

「あの隅にあるC C Dカメラと……」

龍人が指差した先に長さ10センチ程度の円筒が確認され、こちらを向いている。

「そこの机に置いてある、マイク。あと……」

部室のドアが突然開き、黒いツヤのある髪をオールバックにした男が入ってきた。

「タイミングよく現れた、校長先生」

「……リコート、ヒント三つじゃない……」

「うん。じゃあ三つ」

しかし、須藤と松川の耳には届いていないようだ。

一部始終をカメラ越しに見ていた校長により、無事、須藤と松川は後日臨時の職員会議に掛けられることとなつた。

「校長先生、ありがとうございます」

「いや、スマンなあ。本来あつてはならないこと。厳罰に処さねば

「よろしくお願ひします」

校長は“あとは任せろ”と言つて、退出していく。

「あの……ありがとうございました」

涼子が深々と頭を下げる。

「別に大したことじやない」

龍人が事も無げに言ひつ。

「でも……」

「あまり気にしないでね。私たちはへんな犯罪がイヤなだけだから」「そもそも、犯罪好きってヤツはあまりいないだろ」

ツクシのフォローと龍人のツッコミヒ、涼子から笑顔がこぼれる。それを見て、龍人が一言。

「我々は、富野さんに笑顔が戻ったことが、一番嬉しい」「カツコいこと言わないの。ほとんど趣味のクセに」

「趣味なんですか？」

「そう、趣味。そのうち、どつかのフリーのルポライターみたいに、不振人物として連行されるわよ」

「ルポライター？」

「それは困る。兄はいないし、肉親や知り合いに刑事局長はいない……」

「刑事局長？」

涼子はさっぱり解らないようだ。それなりに有名な話なのだが。

「まあ、万事解決めでたしめでたし、だねっ！」

「いや、もう一つ残つている」

龍人は、まだ仕事が残つているというのか。ツクシは何が来てもいいように構える。

「職員会議で使う映像の編集だ。昨日のDVDから、松川の犯行のシーンだけ抜き出せばいい」

ツクシは敬礼のポーズをとる。

「りょーかいですっ！」

「ま、明日でいいだろ。今日は解散だ」

「あ、あの……」

涼子が口を開く。

「今日も……お願いできますか？」

「平氣平氣大歓迎！一緒に帰る。事件も解決したし、優しいリュー
トがなんかおごってくれるよ！」

「……ツクシはそればつかだな」

「今日はアイスがいいなあ」

「富野さんには、ネタ提供の対価ということだから、やぶさかでは
ない。だがツクシにおごる理由はない」

「いーじゃんいーじゃん。気にしないの」

なんだかんだ、結局おごるハメになってしまつのが、いつもの二
人なのだ。

(後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。

以前投稿しました作品で、予想外の好評をいただいたためにリュート、ツクシのコンビ再登場となりました。

とはいっても、以前投稿した作品を読んでないと解らない……。というような構造は嫌いなので、やつていません。この作品はこの作品だけでいいのです。

また。

ご感想等いただけますと、非常に励みになります。酷評も含め、必ず読ませていただいてますし、参考にさせてもらっています。よろしくお願ひいたします。

そして、重ね重ね、ありがとうございますました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7076a/>

盗撮された下着泥棒

2010年10月8日12時57分発行